

顕微鏡でiPS細胞などを観察する高校生ら
13日、坂井市の県教育総合研究所



坂井・県教育総合研ラボで講座

iPS細胞学び「感動」

9高校60人が最先端体感

再生医療の臨床研究が加速している人工多能性幹細胞(iPS細胞)を県内の高校生が観察する講座が13日、坂井市の県教育総合研究所サイエンスラボであり、科学の面白さや最先端の研究に触れた。

同研究所が午前、午後の2回開き、藤島、高志、武生、若狭など9校から計約60人が参加した。京都大iPS細胞研究所(CiRA)の和田濱裕之特定研究員、荒岡利和特

命助教が講師を務めた。

午前の部には約30人が参加。ボードゲームでiPS細胞について学んだ後、和田濱さんの指導を受けながら、顕微鏡でiPS細胞と、同細胞から変化した神経、心筋、肝臓の3種類の細胞を観察した。生徒はそれぞれがどの細胞か考えながら、顕微鏡をじっくりのぞき込んでいた。

荒岡さんはiPS細胞から作った心筋細胞が実際に動いている様子を見せ、「iPS

細胞はいろいろな細胞に変化させられるが、まだまだ完璧ではない。より本物に近いものを作るため、研究を進めて

いかなければならない」と話した。高志高1年の戸川賢太郎さんは「ボードゲームで学んだ

iPS細胞の知識と、観察から得た情報が一致して感動した」と目を輝かせていた。(黒川かおり)